平成２７年度研究協議会資料

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 都道府県・  指定都市番号 | | 40 | | 都道府県・  指定都市名 | | 福岡県 | 研究課題番号・校種名 | ２　高等学校 |
| 教科名 | 看護 |
| 研究課題 | 新学習指導要領の趣旨等を実現するための教育課程の編成，指導方法等の工夫改善に関する実践研究  ○生徒の主体的な学習を通して思考力,判断力,表現力,技能を育成する指導方法等の工夫改善と学習の実現状況の把握についての研究 | | | | | | | |
| 学校名（生徒数） | | | （1173人） | | | | | |
| 所在地（電話番号） | | | 福岡県北九州市八幡西区堀川町12番10号（093-602-2100） | | | | | |
| 研究内容等掲載ウェブサイトURL | | | | | http://www.orioaishin.ac.jp/ | | | |
| 研究のキーワード  グループ学習　コミュニケーション | | | | | | | | |
| 研究成果のポイント  ○共通の課題やテーマに向けて,授業のなかで取り組ませたグループ学習の方法は,生徒の思考を深め判断力,表現力,技能を育成する指導方法として有効であった。  ○臨地実習における実習指導者・患者との人間関係を築くための指導方法として,教材を実際に展開される場面を想定した役割演技を授業のグループ学習に取り入れたことにより,生徒が臨地実習場面で実際に応用することができた。 | | | | | | | | |

１　研究主題等

（１）研究主題

|  |
| --- |
| 基礎看護の授業を通して思考力,判断力,表現力,技能を育成する指導方法の工夫改善についての  研究 |

（２）研究主題設定の理由

　　本校の多くの生徒たちは,臨地実習において実習内容を言語化することに苦手意識を持っている。また,臨地実習での実習指導者や患者との人間関係を築く過程並びに主体的に学習することが身についていない状況がある。そこで生徒たちが臨地実習に入る前の教科指導において表現力や思考力を育成するため看護技術の授業方法の改善を図り指導方法を標準化するため。

（３）研究体制

　　学校長,教頭,看護科全教員で取り組み研究の責任者を3名とした。研究の対象となる3年生の生徒には,倫理的配慮として研究の目的を説明しアンケート調査やインタビュー等の回答に対しては個人の学業成績には一切影響しないことを説明し生徒の同意を得て実施した。

（４）２年間の主な取組

|  |  |
| --- | --- |
| 平成26年度 | ・校内実習記録用紙を使用し授業の進度毎に記録の課題に取り組ませた。  ・臨地実習前に,臨地実習用記録用紙を用いて日常生活を基にした記録,家族を対象とする記録の課題に取り組ませた。  ・臨地実習前に校内教員を患者役に血圧・脈拍測定を実施させた（10人/生徒１人）。  ・血圧・脈拍測定実施終了後,生徒と教員へのアンケート調査を実施し生徒自身に臨地実習に向けた課題を考えさせた。  ・学校見学会で中学3年生を対象にベッドメイキングのデモンストレーションを実施させた。  ・中学校での出前授業で血圧測定のデモンストレーションを実施させた。  ・実習終了後の生徒へのアンケート調査実施・評価  ・校外ボランティア活動と体験発表　・終了後のアンケート調査実施ならびに評価。 |
| 平成27年度 | ・コミュニケーション力を高めるため 臨地実習場面でのコミュニケーション例を想定して,教員が患者・家族・実習指導者役になり生徒が考えた対処法に取り組ませる授業（グループ学習方法　公開授業）  ・授業前後,実習終了後のコミュニケーションに関するアンケート調査実施  ・基礎看護「日常生活と看護」の「安全と医療事故」の授業にグループ学習を取り入れた。  ・生徒が自分を知る目的で,エゴグラムチェックを実施  ・アンケート調査結果をもとに生徒へのインタビュー実施 |

２　研究内容及び具体的な研究活動

（１）研究内容

　　・看護科３年生88名　２クラス 専門分野Ⅰ　基礎看護の看護技術2単位が研究対象である。

　　1)思考力・判断力・表現力・技能を育成する指導方法の改善

　　　①看護技術の指導計画書（安全管理の技術）内容の確認と学習指導案を作成。臨地実習前に「患者,家族,実習指導者との人間関係」と「安全と医療事故」の目標設定が生徒自身でできるように資料を作成しグループ学習を実施した。コミュニケーション力の向上に向けては,生徒の不安要因から対策を含め生徒自らが気づき解決策を見つけることができることを目標とした（公開授業）。

　　　②授業の前後と実習終了後にコミュニケーションに関するアンケート調査を実施。

　　　③生徒自身が自分を知る目的でエゴグラムチェックを実施

④３年生の臨地実習において実習指導者とのコミュニケーションに困った生徒数がゼロを示したため具体的に把握するために両クラスから8人ずつ無作為に選んだ生徒に臨地実

習でのコミュニケーションの実際のインタビューを実施。

⑤継続中のグループ学習の取り組みについてリーダーシップ,論理性,対人能力,説得力の観点から生徒・教員でそれぞれ評価を実施した。（評価項目毎5点満点）

（２）具体的な研究活動

1)①「安全と医療事故」の単元で使用する教材は看護学生用専門雑誌ナーシングキャンパス(Vol.2No.10環境整備）を参考資料とした。グループ学習の準備として入院中の転倒・転落を予防するための映像教材と教授資料として「ナースのための危険予知トレーニング」を使用してKYTシートを作成した。臨地実習中に生徒が実習記録を紛失するというインシデントが1件あった。生徒から実習指導者へ報告があり教務が指導のもと報告書を作成させた。このインシデント発生の直後に,実習生全員でインシデントの事例をもとに今後医療事故の発生を回避するための安全管理や事故発生時の危機管理の方法について授業で学んだことを確認させた。なお,この時の実習記録は後に教室で発見された。

前年度の研究結果から生徒が患者・指導者とのコミュニケーションを図ることに不安があることが課題であり教科活動のなかでグループ学習を取り入れ実施した。「患者,家族,実習指導者との人間関係」を円滑にするためのコミュニケーションの取り方を考えさせるため「私が考えた対応法　コミュニケーション例」のワークシートを作成した。ワークシートをもとにグループ学習に取り組ませた。グループ学習で導き出した生徒の対応を発表する場面に6人の教員が患者,患者の家族,実習指導者役をそれぞれ演じた。また,教員はワークシートをもとに実習指導者は実習生の報告に何を求めているのか等相手の側に立って考え受け止めるように具体的に指導に当たった。

グループ学習の要領は,ア）メンバーは生徒の特性を考慮して編成した。イ）生徒は宿題として課題を次の授業までに済ませてくる。ウ）グループに分かれて15~20分間メンバー同士で課題について協議し生徒が自発的に発表者を決め全員の前に出て発表する。エ）相手の意見をしっかり聞く。オ）全員が意見を出す。カ）教員の助言・指導を原則とした。現在もグループ学習は継続中である。九州５県の５年一貫教育校で取り組んでいる高校３年次を対象とする「全県下看護師国家試験統一模擬試験(H28.3.4実施予定)」に向けてグループ学習を取り入れている。このグループ学習では自分で調べたことをグループの中で発言しメンバーの解説を聞く,全員の前で発表するという経験を重ねることを通して他者とのよい人間関係を築くためのコミュニケーション力を高める基礎的技術を養うことと主体性を養うことを目的とした。

　　　②授業終了後のアンケート調査結果では,「授業のなかで教員の役割演技を見て想像しやすかった」「グループ学習のなかで患者と話す話題や注意する点を色々な角度から見た意見がたくさん出たので今後のことが分かった」等グループ学習で,88.4%の生徒が困っていたことが解決している。また,5.8%の生徒は解決していなかった。3年次の実習において実習指導者とのコミュニケーションで困ったという生徒は0%となっている。しかし,患者とのコミュニケーションにおいて2年次(42.0%)より71.0%の生徒が困った場面に遭遇していた。そのとき生徒はどう対応したのかをみると,例えば,聞き取りにくい構音障害の患者との対応では患者にゆっくり話してもらう,非言語的方法で対処する等改善に向けて対応しており実習指導者にも相談している。3名は対処方法が取れていない。

　　　③エゴグラムの結果をよい人間関係を築いていくことに利用するようアドバイスを実施した。生徒の反応は自分の結果に興味を示した。

　　　④実習前のコミュニケーションの授業で「他の生徒の意見や教員との役割演技」を通して考えたことが実際に役に立っている。さらに「看護過程をはじめ履修科目が増え2年次の実習の経験があること」が実習に積極的になれたという生徒の意見が出された。

⑤生徒による評価結果では,両クラスとも「話はテーマより逸脱することはなかった(4.39点),他のメンバーと分け隔てなく付き合えた(4.25点),グループ内の協力はうまくいったと思う(4.25点)」という項目の平均値が高い。「自ら進んでリーダーを引き受けた」という項目は両クラスとも極端に低い(2.36点)。教員の評価では「話はテーマより逸脱することはなかった(4.22点)」「グループの雰囲気を明るくした(4.0点)」という項目の平均値が高い。「発言の少ないメンバーにはこちらから意見を求めた」という項目で極端に平均値が低い(2.66点)この項目は生徒側も(2.83点)低い。

３　研究の成果と課題

1. 成果

○

|  |
| --- |
| 臨地実習における患者・実習指導者とのコミュニケーション力を高めるために,臨地実習で実際に展開される場面を想定した役割演技を授業に取り入れたことが臨地実習場面での実際で生徒が応用することができた。生徒はこの授業のグループ学習のなかで「メンバーの意見から自分と違った対応法,自分になかった発想や言動を知った,不安が解消した,みんなの色々な案が勉強になった,役割演技でイメージができた」とグループ学習の中で学んだことを活かし２年次の実習で困ったことや不安を解決していることが分かる。生徒の発言からも２年次の実習体験も積み重ねられており, 指導者とのコミュニケーションにおいては問題を抱えた生徒は0%となっている。しかし,患者との対応においては2年次より困った場面に遭遇した生徒が多くなっている(71.1%)。が,その対処法をみると,例えば,構音障害の患者との対応では患者にゆっくり話してもらう,非言語的方法で対処する, 実習指導者に相談する等困った場面で生徒自身が改善に向けて対処方法を考え対応していることが分かる(96.5%)。これは3年次では成人看護の実習が看護過程を使用して受け持ち患者の情報収集をはじめとする看護活動が展開されることが患者との関係性において２年次より深くかかわることが要因と考えられる。安全と医療事故についてはインシデント発生時に生徒からすぐに実習指導者や教員に報告をして医療安全の視点で振り返り・考察をすることができている。この学年は1年次から看護技術,LHRの時間にグループ学習を取り入れてきたのでグループ学習における約束事を理解している。インタビューでの生徒の意見で,グループ学習で学んだ事は,「考える幅が広がり行動が広がる,コミュニケーションは困らずに対処できることが分かった,自分の知らなかったことを新たに発見できる,３年生になり考え方が変わった」等であった。また,グループ学習の評価において「話はテーマより逸脱することはなかった(4.39点),他のメンバーと分け隔てなく付き合えた(4.25点),グループ内の協力はうまくいったと思う(4.25点)」という項目の平均値が高い。  これらの結果を通して,生徒の反応や評価から共通の課題やテーマに向けて取り組ませたグループ学習の方法は,生徒の思考を深め判断力,表現力,技能を育成する指導方法として有効であったと考える。 |

1. 課題

○

|  |
| --- |
| この授業でのグループ学習の方法は，３年次の臨地実習で患者との人間関係において,困った場面に遭遇しても96.5%の生徒が自分で解決していく対処方法をとっており,授業のなかでコミュニケーション力を高めるための教育活動が期待できると考える。今後は生徒のコミュニケ―ション力を客観的な測定尺度を用いて生徒の目標設定を考える必要がある。今後の課題として，特に発言の少ない生徒に対しては,授業におけるグループ学習のなかで生徒同士の役割演技も取り入れて発言できることを目標とする計画的な学習活動の取り組みが必要であると考える。また,同時に教員は生徒が発言できた時は,言動の承認をしていき生徒の自己肯定感を高めるように関わり支援をしていく必要がある。 |

（３）指定期間終了後の取組

　　　この２年間の研究で取り組んできた看護技術の授業における指導方法を標準化すること

ができた。今後は,標準化した指導方法をもとにさらに改善しながら生徒の主体性を養い,思考

力,判断力,表現力,技能を育成する学習活動の支援を継続していく。